

911.3
八
中

俳諧十論

中

才八言行論

抑も能儀の言りとはいふおとろけおこりおこり
儒師の大たり老在揚墨のたるといふれり言りの
物ふとくふれむはれ申すも凡雅のたるとは言連ぬの
おありて當時よりと連言もく人のまのくくか
あつた中子以上の人とては月雲の蹟跡とては
花鳥の色にまゝはて町人百姓の所具まのりて
三罪の言とては素前素前の男とては連言は
とまりたりや、草花の言とてはそれらもあ



一論

一巻と兼に巻の口所を置かれし一巻の能讀とす
ハ中以下 ^{口得}に凡雅とひらめせし中以下 ^{口得}の言とす
て中以下の人とていふはいついふ言とす
地の名はのまし能讀とまきく及りぬ
猿にまのの言とすあはれあはれ
りせや ^{口得}と能讀くといはれし洛陽と凡雅の言と
どり武城と凡雅の言とす
婿とあつて作さし作さし
平の塔よのちりて九重の階子とす
いある情知博覧の人とて句の博とす

能讀とあつてしは史記の能讀とす
さしとて物のまなとて論の
さりとて ^{口得}と能讀とす
つと ^{口得}雅俗のちり
言とす ^{口得}の言とす
すあれ ^{口得}と能讀とす
さ ^{口得}と能讀とす
ひく人の言とす
と ^{口得}と能讀とす
の ^{口得}と能讀とす

所々の白状より世に能借の賤るべく一たのく
起とすあつれく今にあらあさるるにふれむと人の耳
を遠く調とさしむとせよあるの世のけいひあらふと
とせよあつれむとせよあらあさるるにふれむと人の耳
よらふとせよあらあさるるにふれむと人の耳
よも能借をせよあらあさるるにふれむと人の耳
何のら新くん^新あつれむとせよあらあさるるにふれむと人の耳
何のら新くん^新あつれむとせよあらあさるるにふれむと人の耳
町人も百姓も業の僧も武家の侍もとのら利用
すも能借とせよあらあさるるにふれむと人の耳

全く表裡の人とふ一一に能借の事ありき也あり
と美しき事ありあらあさるるにふれむと人の耳
子疑とらむとせよあらあさるるにふれむと人の耳
此家の誠とあらあさるるにふれむと人の耳
娘もけいひとせよあらあさるるにふれむと人の耳
らのけいひとせよあらあさるるにふれむと人の耳
とせよあらあさるるにふれむと人の耳
目よあらあさるるにふれむと人の耳
伊賀けいひとせよあらあさるるにふれむと人の耳
とせよあらあさるるにふれむと人の耳

圖 禪觀之 修行 之 要 訣
一 禪觀之 修行 之 要 訣
二 禪觀之 修行 之 要 訣
三 禪觀之 修行 之 要 訣
四 禪觀之 修行 之 要 訣
五 禪觀之 修行 之 要 訣
六 禪觀之 修行 之 要 訣
七 禪觀之 修行 之 要 訣
八 禪觀之 修行 之 要 訣
九 禪觀之 修行 之 要 訣
十 禪觀之 修行 之 要 訣

親中之 禪觀 之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣
禪觀之 修行 之 要 訣

起造と合せしむる耻の二字を例の教ゆして律を
紀傳の論語あるにんやられし紀傳異處の言
うてはよふはこむてあはらこあらん我が家の
まよひしよとほらわんて何へともたさるるん
あしし

才九変化論

亦も紀傳の变化とら世法よ今日のらおもして万物
の不定とあらくきとせえたり付と天地の变化
雨ふりりひるよつらまると蒼とらしと秋とら
ちれふとちりけんと人間の变化よして思とおして

ほとあうやんよなむおて子にあらうひまはあふ
のむにあなひらやんお印のあなはあむも変化と
天地のほわちりとかしらんらん人のあらわらせまに
紀傳の变化と論をくおむらる拍と古今の境を
とらうまちり拍と一中とのあなせられむじの紀傳
い始中換のことりて昇のこくは麗とまらせられ
例の倍りして雅あつて今この紀傳を始換の二口傳を
りく中に風雅の情とあきらりしりて一中とのあなとつた
全く附合のほりして百初とあつて百をあるとら
はれし附合のほりてあつてあつてあつてあつて

親しく附るも要ふべし疎くも附るも要ふべし
全く附らざるも要ふべし一入るべし二句の句意は
おもしろく七句も及ばざらん世に世に世に秘蔵
のりせむとく神家にこそは附るあり第一と
有る附とよみおのり有るふて可くふらるる
おもしろく附るべしと入るべし一入るべしと題
ありても次と會釈とつひも次と道句といふ一巻の
書をけしはよ変化といふ一はれは御借のあじ方とい
はつたの附句はむむ時をえとて我句とあきといふ
は始よ三句の打熱とてはしむる次よ四句のはし

はしむるを次よ同きかはらへとてありてはしむら
は句の題句とあきといふ一神家のあやかりといふは
かゝる言に一念の先ねと論をいふは色教の力を
あはれは性業よ家とあはれはかゝる言に先よとて
あせはらむる言をいふは性業といふ言に先よとて
藤とあきといふはかゝる言に先よとてはしむる
いあやかりといふは性業といふ言に先よとてはしむる
御借の世法ちりとてはしむるは御借の御借の
お念な念をいふは性業といふ言に先よとてはしむる
うあはれをいふは性業といふ言に先よとてはしむる

一らの趣向とありたれとぶ句の言もふ句の言も
紙とるやけあふ言もた。趣向とはいふ言も
七五箇の二條といふ言も一らの言もといふ言
の作もといふ言も一の言もといふ言もといふ言も
我句となすといふ言も一の言もといふ言もといふ言も
二句の箇もといふ言もといふ言もといふ言もといふ言も
て上よあふると下にゆめりえ下にきこぬと上よあふと
りれの和音の上下といふ言も一の言もといふ言もといふ言も
今とらふ句の言もといふ言も一の言もといふ言もといふ言も
その言もといふ言もといふ言もといふ言もといふ言も

さるを附言の法もなりとも言に一分の趣向といふ言
の言もといふ言も一の言もといふ言もといふ言も
人倫の法もといふ言も一の言もといふ言もといふ言も
ありたれとの言もあつても、賤の言もといふ言もといふ言も
衣裳の模様も言帯の格構もふ句の言もといふ言も
中はうといふ言もといふ言も、挨拶といふ言もといふ言も
といふ言もといふ言もといふ言もといふ言もといふ言も
はともいふ言もといふ言もといふ言もといふ言もといふ言も
百約といふ言もといふ言も、一字二條の脾胃と操まもといふ言も
既既に述べたる言もといふ言もといふ言もといふ言もといふ言も

あつとやちのとはせのいふはくは勝よ一カ世の銀
とやいふくは勝のやち揚井よあつとむむとらふ
おちの夜とちうらんをちて會合とらひ道向
とらふ會合をす越のむつうお時よそ人の衣れ
浪たつたさらのめらるる妻色うて夜ふれと除
るせちうと世向の後よ室人あつとらふとらふ
むつうと時を機をせちうとる初とあせ十句と
け會新とてさる。抱あれらて中の操おらちまくに
奪りし世法の時直もけ向は能とてしやうり會新
とらふあつととちうても奪代の自由あれとせと能
能

の地とるはげて一ゆらの奪代け會新よら一
同新よらうて凡雨とて暖のきくいふら時
のあつとらひとて道向は軽く會新いさう
ふらふのちとちうて一ちうて一の有る附を
ち場の操およらうて或をさうてはちうとも
ひらうてはちうて親疎を附あつと奪代と
る初とておちもさるおあつととらふも
ひらうて物のむ極を危さちありて人
ゆらとの位地ちらうてちうておちわく附あつと
あつととらふとちうてちうて有る附のやせ

け附言うをえいよなほの論あり中より能借の事あり
其にお其の上まのりりるありきといふるありの撰
しうたふありて其をちおもひありとありにわ
高くと其向とらしむる撰ちくはよ思ふと句と
たくれり高くとえいよに一思ふとなほあり洋
おりの風流とまりりてあされ入る風流とまり
一しうに世間の附方をえいよに思ふ者とありて
りや句にくりし高くとまりりてありての眼の所
えねの撰とまりりてなれとあ句の撰とせと撰
おありにりおありいといふもせんよらあり

あつてききに能借のめ暗とおるり一も懸いひに附と
といふ句の撰と起とといひ抱子附を諸路の撰
宗因の向しうの撰とといふ色まをよその撰
しう頼政の撰おに河の撰とて向附とあり
い有る附の中れふるとあり一例の打越し人ありて
人偏のさゆとやうもあたりありわけて
おあり撰おの撰とていふを附し自他の撰とて
向附の撰とていふあり一お向を例の撰とていふ
あり撰とあつていふの撰と起るり一しうあり
と向しうと一しう世間を撰にわく撰とて

さるるな例のきこひとも誰とこれにまぬの附下と
或を仇詰のこあしとよりあれりよのほの附方のけり
より彼^{ヤサタ}方(附)とそを傳よめて大なるむくつけると
向附とらあせられと商人もを傳もおち大なるおほ
あしおのと大なると勤くそありしつ附下とあのおほ
こしあしおの詞よあむとほあしてはりあ有ふの傷を
しなのおと主人の仇をばけしつらと附やのあるふに
赤部のち中のみつうにねらおそめ大なるをわし海を
と意留此のりつうとそをわあしおとむむくけり
向附の傷とそわしつうとあむとあしおとむむくけり
大なる

これの用あはし附方と毫末の差ありてまぬ仇詰の
ゆゑふめと信をしつうとあむより情と起るとそを
連れの人の変化とあらと結れいあむもこむもちり
て人のあむのいやもしつうと伸れいあむもあむのい
風景からあんにきこひ村雨のけきとつらぬ田中の松の
あしちこらと附さんまそとあむの情と勤くしつうと
狐よ化されいやらと附らるねらとあむのあしちこらと
する詞のあやとすつうとあむのけと勤くしつうとあむ
いふと起情とそをわしつうとあむの向附と結む時の用
しつうと起情を伸る時の用とあむしつうとあむの

とはらりて御音といひ走といひ鼓音といふことある中此
 中華式より八辨の附合あり今うら十論の記述を以て
 附合のあり十五あるも附合をきくにはうら七名
 八辨も之法の中此細注とある命一況や百韻の百五
 ありんち附合もそれと附合にうら一しとされ連歌
 も此語も佳名を各句より傳ふられと各句の太極
 の一氣うら一して一應うらうらうて實にうらわれいふら
 らねもあくねもあくまうして法もあく式も
 畢竟を信の二子よりても場を名人と初んとい
 てよひのよひばつと論をうら及びんたといひ此語

の二まといふら神宿ありて枕とがいびげといふや
 ぬ遊山歌水より人といひの抱ふといひ一應うらのいひと
 んよまねといひ神男のるねうら他人のねるふといひ
 他人のるねうらと我男のねるふといひらて論保に
 何人といひ一應うらといひとて一應の括といひ
 光りといひ又偏の括といひき第一にうら本身歌の
 名とありて一應うらといひ此括といひとて一應の
 んよまねといひねれと此語後うのうといひ一しと
 一應のうらといひ射とて衣食に一日の操婦といひ
 て力を奉ふのまおさうらうらうらうらうらうらうら

と云ふ一なるまに文章の公道と稱言に能
の世法と信を成じや海なる一能信の
よるものまを要する才一有る附といふ
才と云ふも亦一なるもの即一の
してこれら文章の論も何れも例の能信
のありしりむけ能信の古今と論して
の論を的あるも外務の二行に不
あらんまに古今の法文と呼と

^{「始」}又まゆ ^{「中」} 論 ^{「終」} 論
古也 ^{「終」} 論 ^{「終」} 論

はれぬれをぬぬる昔の能信の
とらけやふくの事一情あり
の事とう論むし今の能信の
あり一情とぬるもの
文章の優るるとも
其ことと評と能信を
律美ととつと教誡といひ
一とあつて書とあつと
凡雅と教誡の論と張子
及愚と訂復の質ちりと
東西の二名の

又あるとも難くしつらと突かすといふ業は子か
まふちまふちを以て凡雅のふらちあつたあつた
勸字文ともいひ座右銘ともいふかといふ馬
の文章訓よけ論ありまふちのまふちといふ
あれい始後之二と所資のい付とつらつら
のい名の中に括子と色まのい文と評さ

追ふ子こそ

さ用ハサ

さう路曲の突かすといふまふち

世句を檀林のふらつておつて例は言供の括子
係とる括のおつてけいふ今この能考のまふち

いれつに獅のまふちとまふち一括子を以て其ま
とまふちといふ

まふちまふちまふちとていふ
まふちまふちまふちとていふ

世言を頼政のおまふちとていふ今く能國のまふち
つらつらまふちまふちを陸奥は万里の情と評さ
白河は色色のまふちとつらつらまふち遠近の用不用
ありてまふちまふちのまふちのまふち今もまふち
まふちありてまふちまふちまふちまふちまふち
まふちまふちまふちまふちまふちまふちまふち

才のつとよりいふこと一語の連字能階よくのみなりと
きつてそのおとぎときつぬい何やらすかたをいふ
せねらると同意とし尋ねるといふいと向馬の
類説にけりり論ありきつたといふのは果と
能階よく色のえかきとついで、適句の中此一対と
おとぎり蓋かよひをの文法を始し起後と向附と
いふは、中とと拵子と色とと両向の對ととありと
殊よふの二名と細尾と一とと隔句の錯綜は
双園の法も倒おきの格も句後の長短も諸路のち
ともをいふは向し志しと蓋かよひけ後の不可思議

い才一方の句うらむ梅とけけととよのいふは
編よふとととやまは能階の虚言とけりりまに
十編の信偽とともはけりりや況や。論語のけり
といふては民と又偏の三句ととて真觀群衆の
口意とけりりまにけりりか馬の文章訓、知心の
一字より通遠の二字と辨して果畢竟と身歎
竹木の用あんとする言に才一の詞ととて、鏗鏘
の法もえうたけりりて、評者の口訣とやにとけり
わいり、譯よけ後の畢竟と子要万化も期とと
よりの元大りりと有心附のえよありてなれとと

久い老鳥も新しく世居よおつれい父母も古ん
新古も今日日の変化して作名の儘よころま
せなるもい能造のふ東と兵家の刀法これと
うの世およ鬼答う「た」と供あつとも我家の
ふ段と覚東あそくおあつむまに氷刃の二句
どめて世十論と看破さるるにこれに世居と
世居の和とあつうい虚妄の二論と人ふれ妻
とばらふて能造とさくもらぬ遊あねと
涅槃の二字不説らりもわい論とてを賦ね
のらあつる

才十法式論

世も能造の法式と連うの家に入あつていよお
遠波のさう一合も神木鳥獸のまきういも一た
一司の物と二句と成くち七句ちりおと二句とあ
二句ちりおと三句とあ一三句の式と二句と一
よとぬまのりやうら。事と典の掟とるるをわと
あつらふとあひ法とやまうんふとさあてせ
一やとらうの成ういふうふと約とつらる物と
一都の式と百約とあつるもせせとく能造の法式

貞性の流筆より理木の芥とこれ讀中に終ると
ひびひくともいふ今もさくくおはるも
い古もあふくられせ理るもにの理あふ
とやさくや終句の切字より服の筋さのも才この
よふはも哉と束との和訓をつむ様とををれ
き趣といふ指合を何のたふらや去嫌の何のた
ちりやとむ八月と流りあふらん我を心まらばと
とも能指を何のたふら我とは式の名子い
もさくともいふとさくつならにいふもいふま
まうり——とら論議と夫詩のど——と君父のんごら

一、註本のふとたれとつらき識の二まよとつら
詞のまなとつらつらふらとつらとつら
遠くも儒師の早の向も近くもはるのそつら
博くもあつらつらつらつらつらつらつら
かつらつら耳くも早もつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつら
我つらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつら一人もあつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつら
二、あつらつらつらつらつらつらつらつら

そ人を例の節のようなくそ人連きのうらや
傾城猿木の標とありて能くもいせむらひや
まゝとむけぬ、貞孝式うらよ近のたと判者の
法とと新式の二條とくらく執事のたと一條と
あゝまゝこのはあり連えのはあり又條の例のらね
とまゝと一しけりて、事近のらありやと才二にまゝ
人法とこくけりて我句よくとて原とくく人よ近
の教とこくけりて、調子とまゝとくくまゝと
凡雅の運ちられ、その能くのと換ととむい、
りてくくの附句あんに才一と附のるはうらや

とけりて附句の註向と林とくくお句のうらや
才二とく句の打撃うらやお句のうらやと論とく
の折の妻化とく論のうらやあゝとくくあ句の面
あゝとくくお句のあゝとくく事近うらやとくく註向
のうらやとくくお句のあゝとくく指令のうらやとくく能く
役ありうらや近のうらやとくくやとくくはとくくん
のうらやとくくお句のあゝとくく保とくくを
とくく能くをねと新式あるうらやとくく能く
よらりてとくく近のうらやとくく能くの時やとくく
月老のあゝとくく二とくくうらやとくく彼等の

もるまゝにひらひらとせらるるやうに
ある物ありし時句にすれ難いある物ありし時句に
も物のまゝにひらひらとせらるるやうに
やうにひらひらとせらるるやうに
時あり古やのちひらひらとせらるるやうに
おちぢけのねにひらひらとせらるるやうに
ま和とせらるるやうにひらひらとせらるるやうに
はひらひらとせらるるやうにひらひらとせらるるやうに
なるとひらひらとせらるるやうにひらひらとせらるるやうに
ふれぬ威ありし時句にすれ難いある物ありし時句に

とありし時句にすれ難いある物ありし時句に
有性の節よりひらひらとせらるるやうに
とありし時句にすれ難いある物ありし時句に
古人の詞のすれ難いある物ありし時句に
柔近の一體の自在とありし時句に
之十二應の自在とありし時句に
すれ難いある物ありし時句に
い賭物とありし時句にすれ難いある物ありし時句に
ありし時句にすれ難いある物ありし時句に
しとありし時句にすれ難いある物ありし時句に

野眼とつひ祖録とを子疑一決とつひのこれくを
 儒御の心説とて下意のふらふをば法とすよ教化
 の人れ大秘とありはれやむ此能言の能言は
 といふ判ありて世を例の物にとせしこと連言
 の輝身もいひ控られざる眼也もさへなれや
 我らの能言を能言のふらふとありと能言の
 詞といふおとありとありと能言の辨とありと
 詞とありとありと連言と能言のふらふとありと
 我家の能言と能言のふらふとありと能言の辨とありと
 能言のふらふとありと能言のふらふとありと能言の辨とありと

新式な名の傍訓ありまゝ雅言といひ
 俗語といひとらして能言のふらふにありとありと
 とととれう能言といひとととれう能言のふらふとありと
 洋や世の中^の書言と能言も口ある名の能言といひ
 とれう能言のふらふといひとありと能言のふらふといひと
 世とありと能言のふらふといひとありと能言のふらふといひと
 能言のふらふといひとありと能言のふらふといひとありと
 人といひと能言のふらふといひとありと能言のふらふといひと
 宗近の撰事とありとありとありとありとありとありと
 假名と真名と能言と能言とありとありとありとありと

かしられあひしよもゆにんかへあまひてたれとわの
 ろちかへしつり一例は指令と志願を申しつらね
 役あはれ人の言ふるふぶらあへてあひんはく一
 けり指令のあはれけりお近の教とてくきふて
 とりてあへてあはれ人の言ふよりくも候ふて
 もあはれたれも世世の人にあへて一方のれ節とあはれ
 けりて私めはらひよるにあやまのり一多しは法のな
 と備へて指令とあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 あへてあひに志願とあはれ象物の教も多し本鳥
 ちかへてとて一わの事々のあへてあひに教もよとわ

なとあへてあはれよあやまのあへてあはれ一とと文か
 あまへてあへてあはれい種か一次第に候ふの名
 とよあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 教とあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 名とよあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 我あへてあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 とるよとあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 事よあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 と扱ひのよとあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ
 扱ととらあへてあはれけりお近のよも也若路の扱ひ

フカレコト

こゝろをわなうらむきし能楽のこゝろと云ふことあり
ある時よなるの戯あし論語の精シラらひいよはちや
ふとらしてこそと閑のちひいよせられし一應りと
まのちひいよの優うとちひいよてまに雅俗の
ちひいとまひいよ成ふ文世の論といふんはて新式の
能楽礼よと席と一汁二菜にこそと茶とたんと
かきつらあるおうらむの器物よ氣とほきさう車との
結構よとやうとて一酒と二献よとていひとせら
れや茶人の時らむし能楽の供結とて大よといひ
おとよとてはとてはとてはとてはとてはとてはとてはと

よおとまのちひいよとてはとてはとてはとてはとてはと
郷應の舞うんもちとてはとてはとてはとてはとてはと
祓ふしに例のちひいよとてはとてはとてはとてはとてはと
客者向といひとてはとてはとてはとてはとてはとてはと
へしに客向とてはとてはとてはとてはとてはとてはと
詞のよとてはとてはとてはとてはとてはとてはとてはと
あはつらに客向の余儀とてはとてはとてはとてはとてはと
けしはよとてはとてはとてはとてはとてはとてはとてはと
とてはとてはとてはとてはとてはとてはとてはとてはと
のきとてはとてはとてはとてはとてはとてはとてはと

Handwritten text in a rectangular frame, likely a page from a manuscript. The text is written in a cursive style and appears to be a list or a series of entries. The characters are somewhat difficult to decipher due to the cursive nature of the script.

Handwritten text in a rectangular frame, likely a page from a manuscript. The text is written in a cursive style and appears to be a list or a series of entries. The characters are somewhat difficult to decipher due to the cursive nature of the script.

る一々字同よとのいししすらつらひい句「百」も
出言遠近とも世教を在式よ五條ありし今を
一記さるる及びことと申す能浩の席と傳と才一
世教の人和とさくありて論語と温厲の事とあり
才一と談笑の同儀とありてく肉雖も哀平の頌
とあれや能浩とともの陰晴といくくようあり
おも「財の妻あしくあともくも秋月の能浩即能浩と
能浩のよ一あ一もあつた能浩を北し何のあ
法戒とせよ何のあちんやとさるるとありて能
論とさうさう一平話の甲の同と推ととさうさるた

いれ居も今人の戯しして能浩ととのつら同を
変ふかありて世教とさうさるるを身のとあり
そんをよ一能浩とさうさるるをよ一能浩の子
とさうさるるも和順と清松方自在の人といふ
傳曰世篇を全く我家のけあり能浩の式も
かりねいし書世抄よすありてむら山重部も
あつためし書とたつたの二と傳してさうさる
何のありやとて式を何のありやとて法未の
所謂とあれとやとを論と自らさすの式同とい
て五條のらねとさうさるるをよ一能浩のあり

一矢の如くしつゝとるを日にも時の機軸を

青園をあらわす非のやうに

かゝり萩の 風をいささか

世向をそよ風の初折として月秋の七句月うらに青

園二月の階がくれば萩と非の感まじり

らふ志れいも次の非よむじりさこと家よ建て

青園をあらわす月おと念ふれりしまゝに

月とつ子子ころりとし

八月と旅おりのろよ小幡綿

とらふと一矢の名を言ふりしてそよ風をいささか

我々の大藤生とつれのをたれ青園とよめ

あやふらばはもあなまるとお匠のようか

とらふけちよ一矢の如くをなすはくの條目を

あやふらばはもあなまるとお匠のようか

虚をまるとつれんや善あゆめけ段よ風雅の運ぶ

詞を白馬よ祖の常語ちりりちるを青園の

家訓もるの真加といはる運とそよ風雅の詞

の須便あつた能浩を例の非勝地とよめ

次は執事のふらと假名と真名との配と

但し、その古法にありて東華式の文格に就ては
の書法とをありて連字のあはく假名と
りらして記述のあはく真名とりらねば
と真名とのあはく上下の連続のあはく
時ありきとありて右記や録といひ水の音のあ
はく水の音のあはく録といひ水の音のあ
はく録といひ水の音のあはく録といひ
勿論として真名とあはくあはくもあはく
も時をいひ水の音のあはく水の音のあ
はく水の音のあはく水の音のあはく
うづの通用とありていへばわにフにの音韻も

い。わにフの取互横と芭蕉門の假名遣とて真名
我の二條とある例の口傳とをいへばわにフに
扱のは式とをいへばとありて時をいへば
あり右傳のあはくわにフとありてあはく
まはあはくありなれとあはくのはとされ例の
師とありていへばとありていへばとあり
あはくあはくわにフの條目に記述のあはくわにフ
るに教化の大秘法として傳りていへばとあり
あはくあはくわにフとありていへばとあり
自在らりていへばとありていへばとあり

に指月の喩と云ふ言に他道の用とすめば
 ちんまをや才この條同に云のれ節とす
 おに人和の温厲あり今と云私の二子と
 け法の私曲とすやう言に十論の正道と
 多に十論の法とすのいれんやと云と
 五條同と云ふ一いふ我内の文道と云
 二篇の文と云ふは式の二篇の虚と云ふ
 先より虚の文の記して後人への要と
 け十論の實息と通してけり他道の
 ようなく天下に横説を説と云ふ儒の

の教と云ふ忠信の教諸道のほなりてれ子
 通も文行の字にありかくもそのまふと
 さまのささと云ふ人といふ所かたれ
 ちんまをや才この條同に云のれ節とす
 おに人和の温厲あり今と云私の二子と
 け法の私曲とすやう言に十論の正道と
 多に十論の法とすのいれんやと云と
 五條同と云ふ一いふ我内の文道と云
 二篇の文と云ふは式の二篇の虚と云ふ
 先より虚の文の記して後人への要と
 け十論の實息と通してけり他道の
 ようなく天下に横説を説と云ふ儒の

の教と云ふ忠信の教諸道のほなりてれ子
 通も文行の字にありかくもそのまふと
 さまのささと云ふ人といふ所かたれ
 ちんまをや才この條同に云のれ節とす
 おに人和の温厲あり今と云私の二子と
 け法の私曲とすやう言に十論の正道と
 多に十論の法とすのいれんやと云と
 五條同と云ふ一いふ我内の文道と云
 二篇の文と云ふは式の二篇の虚と云ふ
 先より虚の文の記して後人への要と
 け十論の實息と通してけり他道の
 ようなく天下に横説を説と云ふ儒の

とらるる十論の章義とらるる論とらるる所の人
とらるる論とらるる所の人とらるる所の人
に春秋の歎息も口訣 連産に撰出の意に
て家くの秘訣も一とらるる十條此書文
今の一條は沈潜とらるる十論の中此大要文
とらるる論とらるる論語の百八十一
始とらるるの一字より終とらるるの一字とらるる
とらるる人とらるる人と萬古不易のたらるる
とらるる論とらるる論語とらるる沈潜也
沈潜とらるる論とらるる論語とらるる沈潜也

とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論
のたらるる論とらるる論とらるる論とらるる論
つらるるの虚実がたらるる論とらるる論とらるる論
概とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論
孫とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論
とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論
たるる論とらるる論とらるる論とらるる論
のたらるる論とらるる論とらるる論とらるる論
とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論
和漢の凡雅とらるる論とらるる論とらるる論

曾公の一言とあり世とあり近くとあり書の
 一代集も浮橋の詞とありてよ角川の
 ありとありきる今や十論のほをて
 言に論者の大功とほさる傳行よ木鐸の喻を
 ありとあり能説のありていよ仰宗の龍樹
 也書も隆のるとありて世の論師とあり

世の論師とありていよ仰宗の龍樹
 也書も隆のるとありて世の論師とあり

善人の一言を以て善とあるも公世に善とせしむる
は代位也。存続の詞とせしむるは善とせしむるの
善とせしむるありき。や十篇の善とせしむる
善に論者の天功と任す。佛行の不善の論を
善とせしむるは此の善とせしむるの善とせしむる
も善とせしむるの善とせしむるの善とせしむるの
善とせしむるの善とせしむるの善とせしむるの



善人

